

要旨

多くの研究者が、日本語の受身について、直接受身と間接受身、もしくはニヨッテ受身とニ受身など、2種類に分けて分析しているが、おしなべて前提となっているのは、日本語の受身文が統語的に派生される生産的な構文だということである（Kuno 1973, 柴谷 1978, Kuroda 1979 等）。本発表では、間接受身と呼ばれてきた文の中には、動詞語幹に *rare* が付いた形で辞書登録されているものがあると考えようまく説明できる現象があるということを指摘し、さらに、統語的に派生される間接受身文も単文構造と考えるべきだということを主張する。従来、間接受身文に対する複文構造分析のもっとも大きな根拠とされてきたのは「自分」の解釈であるが、その観察は必ずしも複文構造を示唆するものではないことを示す。

1. 2種類の受身文

英語においては、他動詞が受動態になることによって、(i) 外項がなくなり、(ii) 内項に対する格付与能力が失われる、という分析が標準的である。（cf. Jaeggli 1986 Burzio 1986）

- (1) a. John **chased** Mary.
 b. Mary **was chased** (by John).

能動態の場合には、内項は目的語の位置にあらわれるが、受動態の場合には、主語の位置にあらわれる。これは、動詞が受動態になると、目的語の位置にあらわれる名詞句が抽象格を付与されず、その結果、その位置にすることが認可されなくなり、主語の位置に移動して認可されなければならないからであると分析されてきた。

日本語の場合、動詞が付与する抽象格と関係があるのはヲ格であると仮定されていることが多い。ところが、日本語では、動詞語幹に *-rare-* がついてもヲ格は出現可能であり、さらに、新たな項があらわれうることがよく知られている。

- (2) a. ジョンが メアリを 追いかけた
 b. **ビルが** ジョンに メアリを 追いかけ **-rare-**た。
 (3) a. ジョンが家を出て行った。
 b. **メアリが** ジョンに家を出て行 **k-are-**た。
 (4) a. 雨が降った。
 b. **メアリが** 雨に降 **r-are-**た。

ここで、新たに加わる項とは、その事態によって心理的な影響を受ける Affectee（受影者）であると多くの研究で述べられてきた（cf. 山田 1908, Kuroda 1979, 益岡 1991, 金水 1993 等）。Affectee になるには、影響を受ける心を持ったものでなければならないので、無生物は Affectee にはなれない。

- (5) a. ??道が雨に降られた。 [高井 2009b: (23)]
 b. ??ベッドがジョンに寝られた。 [高井 2009b: (24)]

以下では、Kuroda 1979, Hoji 2008 の流れをくんで、動詞語幹が持つ項に対して新たに Affectee も項として加える働きを持つ *-rare-* を、**argument-adding(加項) -rare-** と呼ぶことにする。

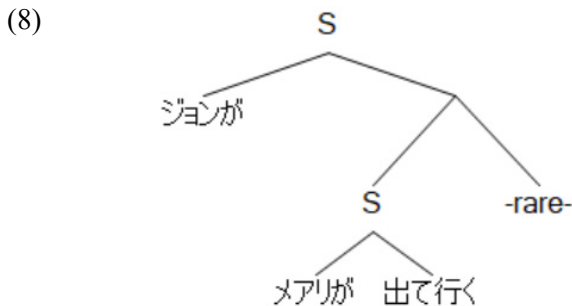
日本語に **argument-adding -rare-** しかないとするならば、受身文のガ格は決して無生物にならない

ことになるが、もちろん、そんなことはない。

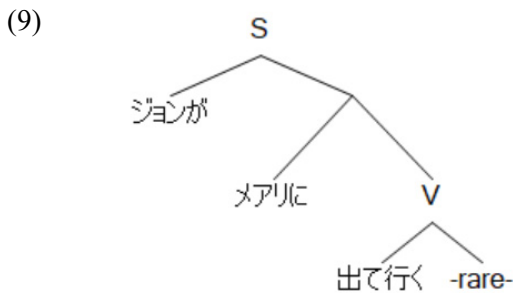
- (6) フェルマーの定理がジョンによって証明された。 [Kuroda 1979/1992: 206, (114)]
 (7) a. ビルのやさしさがクラスみんなに愛されている。
 b. キリスト教の精神が多くの人々に求められている。
 c. 信長の遺言が数多くの家臣に守られている。 [高井 2009b: (26b), (28b), (30b)]

そのため、英語の受身文と同様に、外項がなくなり内項がガ格であらわれる受身文もあると考えられてきた (Kuno 1973, Kuroda 1979, Saito 1982, Miyagawa 1989 等)。以下では、このタイプの **-rare-** を、**argument-reducing(除項) -rare-** と呼んでおく。つまり、日本語の受身文には **argument-adding -rare-** が関わるものと **argument-reducing -rare-** が関わるものがあるのである。

ここで問題にしたいのは、**argument-adding -rare-** が関わる受身文がどのような構造をしていると考えるべきかということである。従来、**argument-reducing -rare-** は動詞語幹と直接 Merge し、単文構造を作ると考えられてきたのに対して、**argument-adding -rare-** が関わる受身文 (いわゆる間接受身文) では、多くの場合、**-rare-** が節と Merge して複文構造を作ると考えられてきた (Kuno 1973, Kuroda 1979)。



これに対して本発表では、**argument-adding -rare-** も動詞と直接 Merge し、単文構造をなすと考えるべきだと主張する (cf. 高井 2009a, 上山 2015, Hayashishita, et al. 2019)。



つまり、**argument-reducing -rare-** も **argument-adding -rare-** も、項構造の異なる別の動詞を形成する働きをするものであり、その意味で、自他対応に関わる他の形態素と同種のものであると考えたい。

- (10) sas-u A が B に C を刺す
 sas-ar-u B に C が刺さる

従来、受身文の構造について、おしなべて前提となっているのは、日本語の受身文が統語的に派生される生産的な構文だということである (Kuno 1973, 柴谷 1978, Kuroda 1979 等)。以下、**argument-adding -rare-** が関わる受身も部分的にしか生産的でないということを示し、統語的に派生される場合でも (9) のような単文構造を仮定したほうが統一的な説明ができるということを主張する。

2. 語彙的間接受身文と統語的間接受身文

まず、受身文の中には、対応する能動文が存在しないものがある。

- (11) a. この大火事で多くの人が焼け出された。
b. *多くの人を焼け出した。
- (12) a. 野党の指導者は大統領に国を追われた。
b. *大統領が野党の指導者を国を追った。
- (13) a. 次郎は海に飲まれてしまった。
b. *海が次郎を飲んでしまった。 [村木 1991:193]
- (14) a. 私はぬかるみに足を取られた。
b. *ぬかるみが私の足を取った。 [村木 1991:193]

このことは、受動文が能動文から作られるのではなく、動詞語幹に-rare-が付いた形で **Lexicon** に登録されている場合があることを示している。

もちろん、だからと言って、すべての動詞語幹+rare-の形式が **Lexicon** に登録されているということにはならないだろう。実際、めったに-rare-が付くことのない動詞語幹でも、文脈によっては間接受身文を作ることが可能なので、統語的に間接受身文を作る可能性そのものは否定すべきではない。しかし、「雨に降られた」「赤ん坊に泣かれた」など、よく用いられる形式の場合は、それぞれ「降られ」「泣かれ」という形で **Lexicon** に登録されていないとは言い切れなくなる。統語的間接受身文の性質を観察するためには、むしろ、通常、受身の形で用いられることが少ない動詞語幹の例に基づくべきである。

3. argument-adding -rare- に対する意図性(intentionality)の制限

そこで、受身文として使われることが頻繁でない動詞語幹で見ると、どのような動詞でも間接受身になれるわけではないことがわかる。たとえば、(15)と(16)はどちらも「付き合う」という動詞語幹が使われているが、(15)は「娘があつ男と付き合い出す」という意図的な動作であるのに対して、(16)は「娘が糖尿病と付き合い出す」という非意図的な動作であり、(16b)の間接受身文は容認できない。

- (15) (「娘」の意志で付き合い合っている)
- a. 娘があつ男と付き合いだして以来、いろいろやっかいなことが起こっている。
b. 娘にあつ男と付き合いだして以来、いろいろやっかいなことが起こっている。
- (16) (「娘」の意志で付き合い合っているわけではない)
- a. 娘が糖尿病と付き合いだして以来、いろいろやっかいなことが起こっている。
b. *娘に糖尿病と付き合いだして以来、いろいろやっかいなことが起こっている。

このように、動詞語幹の外項が意図的 (intentional) に行なう動作でなければ間接受身文にできないのである。以下、同様の例を挙げる。

- (17) (「A 選手」の意志でかわる)
- a. A 選手がポジションをかわって以来、チームは低迷している。
b. A 選手にポジションを変わられて以来、チームは低迷している。
- (18) (「監督」の意志でかわったわけではない)
- a. オーナーの決断で監督がかわって以来、チームは低迷している。
b. *オーナーの決断で監督に変わられて以来、チームは低迷している。
- (19) a. 突然、見知らぬ男に舞台に上がられて、驚いた。
b. *突然、僕の名前に上がられて、驚いた。

- (20) a. いきなり出てきた自転車に当たられて、腰を痛めた。
 b. *いきなり一等賞のハワイ旅行に当たられても、行けるわけがない。
- (21) a. いきなり出てきた自転車にぶつかられて、腰を痛めた。
 b. *急に入った予定にぶつかられて、温泉に行けなくなってしまった。
- (22) a. 急にアイツに切れられて、めんくらった。
 b. *急に電話に切れられて、困った。
- (23) a. 突然、相手ディフェンダにつかれてしまって、動きようがなくなった。
 b. *いつの間にか、傷につかれてしまって、売り物にならなくなった。
- (24) a. *太郎はボールにスタンドに入られた。 [益岡 1991:114, (54)]
 b. *花子は機械に故障された。 [益岡 1991:114, (55)]
 c. *土壇場で、意見に割れられてしまって、時間切れになった。
 d. *いつの間にか、キュウリに腐られてしまった。
 e. *ちょうどタイミングに合わせて、挨拶しないわけにいなかった。
 f. *突然、穴にあかれてしまって、落ちそうになった。

確かに、動詞語幹の外項が意図的に行なう動作でないと思われる間接受身文も存在する。

- (25) a. この塀は、どんな強風に吹かれても倒れない塀です。
 b. 帰り道、夕立に降られて、びしょ濡れになってしまった。

しかし、上で述べたように「吹かれる／降られる」は、比較的によく使われる形式であり、これらがその形式で *Lexicon* に登録されていないとは言い切れない。すなわち、(15)～(24)の観察こそが統語的間接受身文の性質を表すものだと考えたい。

4. 単文構造分析と複文構造分析

(15)～(24)の観察が統語的間接受身の性質からきているとすると、*argument-adding -rare-*は統語的に動詞語幹に付くときに意味的な制限をうけることになる。もし、*argument-adding -rare-*が動詞語幹に直接付くのであるならば、これは語形成の一種ということになり、元の語幹の意味的特性によって制限があるのは当然のことである。また、元の語幹の外項がガ格から二格に変わる点についても、新たな動詞語幹が作られるとすれば、格助詞の指定が変わることは珍しいことではない。これに対して、複文構造分析を仮定した場合、上のような意味的制限や格標示の変化をどのように組み込むのか、非常に難しくなる。

従来、間接受身文が複文構造であるという分析の最も大きな根拠は、直接受身の場合、動作主 NP が「自分」の先行詞になれないのに対して、間接受身の場合には、動作主 NP が「自分」の先行詞になれるという観察であった (cf. McCawley 1972, Kuno 1973)。

- (26) 直接受身：
 花子₁は太郎₂に自分_{1/*2}の部屋に閉じ込められた。 [久野 1983: 213 (71a)]
- (27) 間接受身：
 花子₁は太郎₂に自分₁₂の部屋に籠城された。 [久野 1983: 213 (71b)]

「自分」の先行詞は、多くの場合、ガ格 NP である。

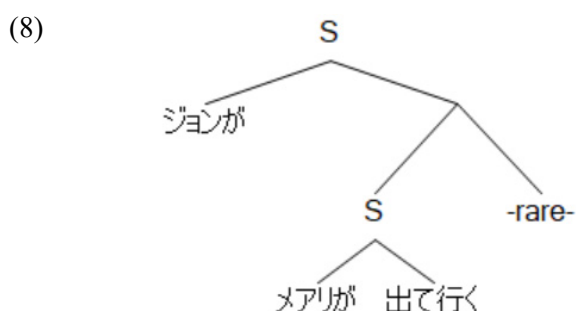
- (28) a. 花子₁が太郎に自分₁のノートを渡した。

- b. ?*花子が太郎₁に自分₁のノートを返した。
- c. 花子₁が[自分₁が一番早かった]と言いつらしている。
- d. 花子₁が[先生は自分₁を推薦するべきだった]と言いつらしている。

ガ格 NP でないにもかかわらず「自分」の先行詞になれるということが知られていた例としては、(27)のような間接受身の二格 NP と、被使役者の二格 NP とがある。

(29) 花子₁が太郎に₂自分_{1/2}の部屋を掃除させた。

そのため、統語的な「主語」の位置にある NP が「自分」の先行詞になれると仮定すればいいのではないかとされ、間接受身の二格 NP も被使役者の二格 NP も「主語」の位置にあるはずだと考えられてきた。



しかし、そもそも「自分」の先行詞が必ずしも「主語」に限られていないことは、しばしば指摘される通りである。

- (30) a. 自分₁が癌でなかったことが、浩₁を喜ばせた。 [McCawley 1976]
 b. 早くナオミ₁を自分₁の家へ帰してしまいなさい。 [Kitagawa 1980]

「自分」の先行詞になりうる NP の範囲をどのように決定するのが適切であるかは難しい問題であるが、(30)のような例がある以上、(27)や(29)が多義的であるからといって、複文構造を仮定する必要があるとは限らない。「自分」の解釈に、共感可能性のような概念が関わっていることはおそらく確実であると考えられるが、間接受身文の二格 NP は動作主であるから、その観点で「自分」の先行詞の候補になりうることは不思議ではない。そのように考えれば、むしろ、不思議なのは、(26)が多義的でないという観察のほうである。実際、(26)でも、多義的な解釈が不可能ではないと私たちは考えている。次の文も、いわゆる直接受身文であるが、動作主である「三郎」が「自分」の先行詞であると解釈することは可能ではないだろうか。

(31) 次郎₁が 三郎₂に 自分_{1/2}のガールフレンドの部屋から挨拶されたらしい。

そうは言っても、(26)の場合、動作主を「自分」の先行詞にとる解釈が容易でないことも確かである。その点については、次のように考えたい。argument-reducing -rare-が関わっている場合、動作主は、argument-reducing -rare-の働きによって、項ではなくなっているはずである。これに対して、argument-adding -rare- の場合には、動作主も項のままである。したがって、(32)のように考えればよい。

(32) 付加詞は「自分」の先行詞になることができない。

つまり、argument-reducing -rare- が関わる受身文の動作主は「自分」の先行詞になることができず、argument-adding -rare- が関わる受身文の動作主は「自分」の先行詞になる可能性があるのである。(26)の容認性判断に揺れが認められるのは、この文自体は argument-reducing -rare-でも argument-

adding -rare- でも生成可能な文だからであり、argument-reducing -rare-で考えた場合には、動作主が「自分」の先行詞になれないと感じ、argument-adding -rare-で考えた場合には動作主が「自分」の先行詞になれると感じるのである。(注：直接受身文／間接受身文、もしくは、ニヨッテ受身文／ニ受身文と、argument-reducing -rare-／argument-adding -rare- の複雑な対応関係については、Hayashishita, et al. 2019 でまとめている。)

(26)と(27)の対立は従来、複文構造分析のもっとも大きな根拠とみなされてきたが、以上、述べてきたように、複文構造を仮定しなければ説明できないわけではない。

5. 結論

従来、-rare-は動詞と直接 Merge する場合(すなわち単文構造)と節と Merge する場合(すなわち複文構造)とがあると考えられてきた。それに対して本発表では、-rare-は常に動詞と直接 Merge するものであるという分析を主張した。つまり、argument-reducing -rare-も argument-adding -rare-も、項構造の異なる別の動詞を形成する働きをするものだけということになり、そのように考えることによって、接続する動詞語幹に意味的な制約があることや動作主の格標識が変化することが無理なくとらえられる。-rare-が常に動詞語幹と直接 Merge するならば、動詞語幹+-rare-の形の語彙とも簡単に見分けがつかないことになる。実際、動詞語幹+-rare-が統語的に派生していないものがあると考えたほうが統一的な説明が可能になるということを示した。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP16K02631 およびソフトバンクロボティクス株式会社との共同研究「日本語の談話理解・発言文生成が可能な人工知能システムの研究」の助成を受けたものである。

参考文献

- Burzio, Luigi (1986) *Italian Syntax: A Government-Binding Approach*. Reidel, Dordrecht.
- Hayashishita, J.-R., Iwao Takai, and Ayumi Ueyama (2019) "Two types of passives in Japanese: Reconsidering Kuroda (1979/1992)," ms. Otago University and Kyushu University.
- Hoji, Hajime. (2008) "Reconstruction Effects in Passive and Scrambling in Japanese." *Japanese/Korean Linguistics* 13, ed. by Mutsuko Endo Hudson, Peter Sells and Sun-Ah Jun, 152-165. Stanford, CA: Center for the Study of Language and Information.
- Jaeggli, Osvaldo A. (1986) "Passive," *Linguistic Inquiry* 17, pp.587-622.
- 金水敏 (1993) 「受動文の固有／非固有性について」, 『近代語研究』9, pp.474-508, 武蔵野書院.
- Kitagawa, Chisato (1980) "A Review of Hinds and Howard (Eds.): *Problems in Japanese Syntax and Semantics*," *Language* 56, pp. 435-440.
- Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Language*, The MIT Press, Cambridge.
- 久野暲 (1983) 『新日本文法研究』(大修館書店)第12章 (pp.192-219)
- Kuroda, S.-Y. (1979) "On Japanese Passives," in Bedell et al. (eds.), *Explorations in Linguistics: Paper in Honor of Kazuko Inoue*, 305-347, Kenkyusha, Tokyo. (Reprinted in Kuroda 1992: 183-221).
- Kuroda, S.-Y. (1992) *Japanese Syntax and Semantics*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- 益岡隆志 (1991) 「受動表現と主観性」, 仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』, pp.105-121, くろしお出版。
- McCawley, Noriko (1972) "On the Treatment of Japanese Passives," *Papers from the Eighth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, pp.256-270.
- McCawley, Noriko (1976) "Reflexivization: A Transformational Approach," in Masayoshi Shibatani (ed.), *Syntax and semantics 5: Japanese generative grammar*, 51-116. New York: Academic Press.

- Miyagawa, Shigeru (1989) *Structure and case marking in Japanese: Syntax and Semantics* Volume 22, Academic Press.
- 村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』ひつじ書房.
- Saito, Mamoru (1982) "Case Marking in Japanese: A Preliminary Study," Unpublished manuscript, Massachusetts Institute of Technology.
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』, 大修館書店.
- 高井岩生 (2009a) 『スコープ解釈の統語論と意味論』, 博士論文, 九州大学.
- 高井岩生 (2009b) 「直接受動化と動詞の項構造」 電子情報通信学会技術研究報告 Vol. 109, No.140, pp.11-16.
- 上山あゆみ (2015) 『統語意味論』、名古屋大学出版会。
- 山田孝雄 (1908) 日本文法論, 宝文館.